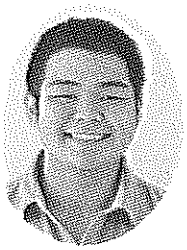
四国農学連報
第19号
発行者
四国地区農業大学校
学生連盟
編集
愛媛県立農業大学校
学生自治会

農大生としての拘りと農学から学んだ自分への展望

四国地区農業大学校学生連盟会長
愛媛県立農業大学校学生自治会長
坂本智一



私はこの愛媛県立農業大学校へ入学し、農学を学び始めました。最初こそ、農業機械整備や圃場整備なんてろくに学ばなくても栽培基礎や農業経営を学べば大丈夫だと思っていましたが、その考え愚かだと気づかされました。農大でも、先進農家研修でもそうだったのですが、機械の不調により作業が進まず数時間無駄にしたからです。

私は、その経験から総合農学科園芸コースでも少数の機械班に入る事にしました。その班では草刈機の分解整備からトラクターのタイヤ交換といった基本のこと、そして、ハウスや狭い圃場での耕運機の効率的な使い方まで学ぶことができました。そして、愛媛県が認定する農業機械士にも合格することができました。

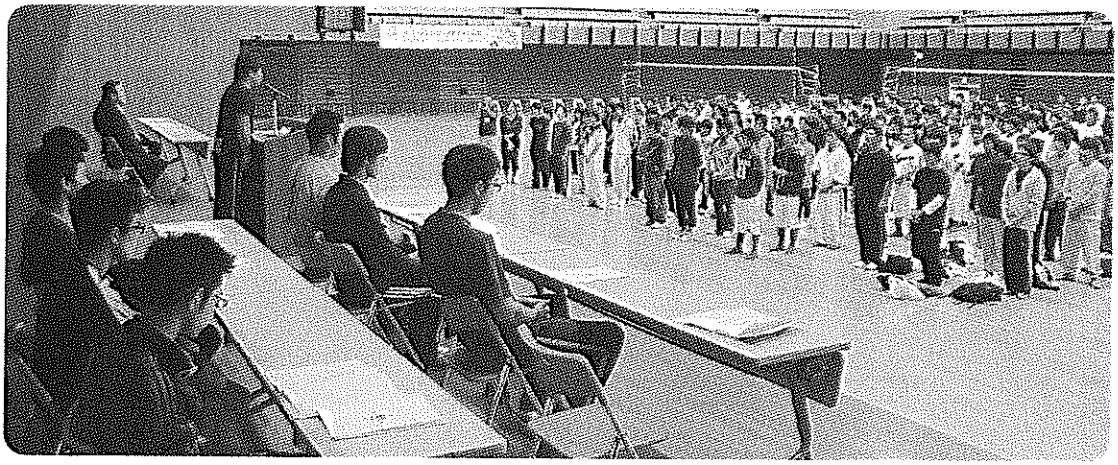
圃場整備に関しても、草刈や圃場内に蒔く肥料の計算まで全て、順序立ててクリアーしてこそ、農業が始まるのであると気づかされました。それは、栽培基礎で学んだことを生かすも殺すも栽培する環境が良好でなければ駄目だからです。そのことを、教えて下さったのは大林先生です。先生は日頃からトラクターの使い方も教えて下さったり、ねぎの栽培や休日も私のために卒論のお世話をしてくださったりしていただいている恩師です。特に圃場整備に関しては熱意があり、よく、圃場内に蒔く肥料の計算や追肥に関しては、野菜ごとに細かく教えてくださいます。そのため、私も野菜を育てる段階までにすることの大切さを学ぶことができました。

私は、これらの経験から、農大生としての拘りは、段取りを立て確かな計画性と大きな基礎をつくる実行力だと学ぶことができました。その経験から学んだこと達成できたことは今後の自分に大いに役に立つものだと考えました。

私は、この農大から学んだ拘りを胸に農学を生かせる企業に就職したいと日に日に思うようになりました。そして、株式会社コメリへの内定をいただきました。コメリは、農業・建材に強くホームセンター業界でも大手です。企業理念も人々の幸せを中心とした考えで、私は、二年間農大で学んできた日々の事を生かせると確信しました。私は、これからの人生、この農大で学び培ってきたことを十分に生かし、地域農業の活性化に一役立てる人間になっていきたいと思っています。

今後は、少子高齢化が加速し大規模農家に集約される懸念は大いにあります。ですが、小規模農家こそ日本が昔から続いている形態で、中山間地域など農業の大規模化は不可能な地理的条件の多い日本だからホームセンターのようにそばにある施設が農家を支えていく上で大切な企業形態だと考えています。そして、ホームセンターに一人でも農学を学び農業全体を見渡すことのできる農大の卒業生が必要で、私たち農大生の存在が大事なんだと思います。

それは、私たち農大生の、考え方のほんの一部だと思います。でも、農家になったり農業関連の企業に就職したりと日本の農業を支え発展させることができるのは私たち農大生だからこそ、できることだと思います。今後、農学を学ぶ後輩たちは、今、している草刈等を無駄だと考えず「俺が日本の農業を変える」と言えるようになってもらいたいです。そして、今年卒業の同期達は「自分は枯れない」という農学で学んだ精神を胸に一緒に新たな世界に飛び出しましょう。



（四国地区農学連スポーツ大会　平成二十四年十月三日）

農大だからこそ学べることがある

愛媛県立農業大学校
校長　戒能　豪

この四国農学連報第十九号を読まれる今春卒業する学生の皆さんは、二年という短い期間に多くの知識と技術を学ばれたことと思う。

学校側としては、二年間でより多くの知識と技術を学ばせようと、盛りだくさんのカリキュラムを組んでいるが、私はカリキュラム以外に、農大だからこそ学べることが実にたくさんあると思っている。

そのひとつが、実践教育として課せられる実習を通じて体感できる農業の真髄である。具体的に言うと、圃場や施設内での季節を通じた実習において、肉体労働をした後に身体の隅々から湧き起こる爽快感、満足感、達成感こそが農業を一生の職業に選択し得る主な理由だと思うのだ。この感覚は、体験した者にしか味わえぬ究極の至福感であり、それこそが農業の醍醐味なのだ。

二つ目は、寮での共同生活が、混沌とした現代社会を生き抜くことに役立つ人間力を育むことである。

寮生活をすることで協調性や忍耐力、さらには、他人への思いやりや、はたまた社交性などといったいろいろな資質が培われる。

入寮時に不安を抱いていた学生も、夏休みを迎える頃には、育った家庭よりも寮での生活の方を気に入る者すら現れる。時にはプライバシーが守れぬ不満もあろうが、その経験には決して金では買えないすばらしい価値がある。

実は、そういう自分も大学で一年間の寮生活をした経験があり、共同生活を共にした友との揺るぎない人間関係が形成されることを知っている。こうした人間関係が、卒業後も大きい財産になることを信じ、同僚だけでなく、より多くの先輩や後輩との信頼関係も築いて欲しい。

残念なことに、全国で多くの学生寮が廃止の憂き目に遭ってきたが、農大においては、その良さを知る卒業生と共に可能な限り守っていきたいと考えている。

三つ目は、教える側に立つ者が言うのは、少々気恥ずかしいことであるが、農大や試験場の先生方との人間関係は、これから一生続くことである。

特に、プロジェクト学習では、指導教官から昼夜を問わない熱心な指導を受けたことと思うが、こうした中から醸成されるお互いの信頼関係は、卒業後もずっと続くのである。農大での人間関係が、卒業後の貴重な財産になることを知っておいて欲しい。

農大には、学生を教育指導する機能はもちろん、諸君が社会に出てからもあらゆる相談に乗れる機関でもある。諸君も知っているように、卒業後も農大を訪れる先輩諸氏がたくさんいる。どうか諸君も、卒業後、機会あるごとに、農大を訪れて欲しい。

そして最後に言っておきたいことがある。それは、自分ひとりで勉強をする習慣を身に付けてから、卒業して欲しいのだ。

農大での二年間（あるいは四年間）で学べることには自ずと時間的な限界がある。分からないことができたら、放ったらかしにしないで、自らが納得するまで追求して欲しい。これを生活習慣として身に付けておきさえすれば、長い人生で、それをしない人と較べて大きな差ができる。それは、あたかも作物の生長を見て学ぶがごとくにだ。〝なぜ〟と疑問に思うこと。そして、その疑問を解決し続けることが、諸君の知識の豊かさと大きな人間への成長とを約束してくれる。

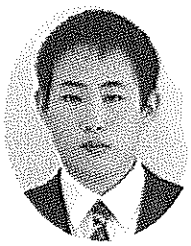
終わりになるが、農大卒業後、多くの者が就農していた時代と違い、最近では、農協や企業等に就職する方が多くなってきている。

私たち学校関係者は、皆さんの卒業後の進む道がそれぞれ違っても、農大で学んだこと、身に付けたことを大きな力に、人間関係を大切にしながら社会で活躍してくれることを心から願っている。

農大生よ、頑張れ!!

農業に対する想いや学生生活に関すること

高知県立農業大学校
園芸学科一年　野菜専攻
岡村　翔



私の実家は、専業農家でナスを栽培しています。私は最初、農業をしようとは思っていませんでした。私が小学校低学年の時は、ナスではなくミョウガを栽培していました。

すると、家族が帰宅するのは、毎日のように夜九時から十時でした。だから、私はそんな農業が嫌でした。しかし、いつしかミョウガの栽培をやめ、ナスを栽培し始めました。気が付けば、中学校の時には、農業高校に進学すると自分で決めていました。高校では、植物を栽培するための基本的な知識を身につけました。高校三年の時に、ある先生に農業大学校のことをききました。

私は、高校よりも専門的な知識や技術を学ぶため、農業大学校に進学しました。最初は、ほとんど知らない人ばかりで不安でした。それに、初めての寮生活ということもあり、とても不安でした。しかし、入校してから早一年。寮生活にも慣れ、友達もできました。そして、実習では、それぞれ一人ひとりがプロジェクトを必死に頑張っています。時には、失敗することもありますが、生徒同士で協力しあいながら日々の実習をしています。私のプロジェクトは、ナスの三本仕立てと四本仕立ての収量の違いを調査するというプロジェクトです。正直、うまく結果をまとめる自信がありません。でも、一生懸命、頑張りたいと思います。

農業大学校の行事としては、農大祭、四国農学連スポーツ大会、よさこい祭りといった行事があります。よさこい祭りは、私は初めての経験でした。先輩たちと一年全員が必死に踊りを覚えて、練習をしました。よさこい祭りの本番の日に、たくさん人が見に来ているのを見てビックリしたことを今でも覚えています。一日目の夜に大雨が降って、ビショビショになりながら踊ったのも今では、いい思い出になっています。次も、頑張ろうと思います。また、もう少しすると二年になりますが、今の二年生の

ように後輩にうまく教える事が出来るか不安です。今のうちに先輩方にたくさんのことを教えて頂き、恥じないように頑張りたいです。

今は、まだまだ未熟ですが、農業大学校を卒業するまでには、今より大きく成長できるように頑張りたいです。そして将来、この学校に恥じないように農業をしていけるようになるために、一生懸命、勉学に励みたいと思います。

農業について

高知県立農業大学校
園芸学科一年　野菜専攻
小松祐太

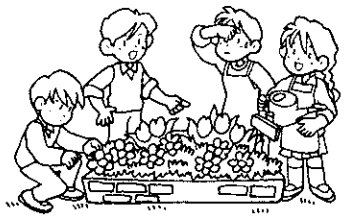
僕の祖父は、安芸市でナスを栽培しています。幼少期は外で友達と遊んだりしながらも時々、祖父のハウスに行って手伝った事もありました。ナスの世話をしている祖父の姿を見て農業は楽しいものなのだと思いました。

その後窪川町（現四万十町）に引っ越し、窪川高校に進学しましたが高校三年の頃、進路先に悩んでいました。学校でも農業コースに入り農業に少し触れていましたが、引っ越してから安芸に戻る時間がなくなってしまい、あまり農業に触れる機会がなくなっていきました。

そして周りの進路が決まっていく中、自分は何がしたいのか悩んでいました。したい事もなく興味ある事もなく、どうしようかと親に相談すると、農業が好きなら安芸に戻り、祖父と一緒に農業をしてみれば？との助言を受けました。確かに高校での農作業は楽しかったし、高校を卒業したあとに祖父とナスを育てれば良いと思い、この農業大学校への進学を目指しました。

そして無事に入学する事が出来ましたが、新しい環境に驚きの連続でした。寮生活というのは知っていましたが、始めは知らない人と過ごすのは緊張しました。しかしすぐに打ち解ける事が出来ました。実習は、自分でひとつの品目を栽培するので自己管理をしっかりしなければいけないと感じます。また肥料や農薬など全く知らないものばかりで、はじめはとても戸惑いましたが専門的知識や技術を学べるのでとても勉強になりました。

行事では、よさこいやスポーツ大会、農大祭などがあり、特によさこいはとても印象に残っています。よさこいは好きでよく見ていたのですが、まさか自分が踊る立場になるとは思いませんでした。初日は雨に苦しめられましたが精一杯踊る事が出来て楽しかったです。もちろん勉強面も難易度が上がっており、難しいですがきっと将来の自分の役に立つと信じて頑張っていきたいと思います。



農業大学校に入って学んだこと

高知県立農業大学校
園芸学科一年　花き専攻
池本将馬

私の家は非農家です。農業に関わったことがなかったので、どういったことを営むのかも具体的にはわかりませんでした。最初は、農業大学校に入学してやりたいことも、目標もなく、学校生活を過ごしていました。しかし、実習などを通して農業の楽しさや苦労などを知りました。特に、蒸せるような暑さの夏のハウスでの作業、寒く厳しい風が吹く中での冬の作業はとても大変でした。けれども、友達の協力や先生方の指導のおかげで作業にも慣れ、しだいに作業効率も上がってきました。さらに、販売実習や校外での研修もあり、こうした中で実践的な取り組みや農家の方々の意見を聞く等貴重な体験をとおして、次第に多くのことが見えてきました。

私は、工業系の高校の出身で、農業との接点はありませんでした。花きの専攻に入って学ぶなかで、花を育てるとともに、フラワー装飾を学びました。フラワーデザインのなかで、高校の時にデザイン科だった自分を活かせるのではないかと思いました。全く繋がらないと思っていた農大での生活で、高校の時に自分が学んだことを活かせて、関連した知識や技術を伸ばすことができるではないかと思いました。フラワーデザインは、オブジェなどと違い、抽象的でなく、季節によって咲く花が決まっており、使える花も限られているので、バランスや色合い等を考えてデザインするのはすごく大変でした。しかし、とてもやりがいのあることなので、これを将来に繋げられるように頑張っていきたいです。

農業へ対する想い

高知県立農業大学校
園芸学科一年　果樹専攻
山下美咲

私の家は農家なのですが、今まで農業に携わったことがありませんでした。祖父母が農業に勤しむなかでも、私は農業にあまり関わろうとはせず、どのようにして営まれているのかも知りませんでした。ですが、まったく興味がなかったということはなく、自分の家で採れた野菜やお米はとてもおいしいと思っていたし、それ自体も誇れることだと思っていました。しかし、現在の日本の農業は後継者不足や高齢化などの課題が山ほどあり、どんどんと廃れていっている産業です。そんな状況で私の将来を考えた時に、農業という選択肢はありませんでした。

しかし、今では農業大学校に入学し、農業を実践的に学んでいる身です。初めは、そのような考えを持っていた私ですが、やはり間近で農業にふれる機会が多い環境と農業に励む祖父母の姿が私の考えを変えてくれました。今では、私も日本の農業に少しでも貢献できればと思っています。

日本の農業で一番の問題になっているのはやはり、就農人口の減少だと思います。農業は辛く厳しい仕事の割には、収入は安定せず、稼ぎが少ないということが多くの若者の農業へ対するイメージだと思います。そのイメージを払拭するためには、私たち農業に携わる者が進んで運動に励むことが大切だと思います。例えば私の身近でも行われている例として、保育園児や小学生を対象とした食育や農育の活動や、また、子どもから大人まで楽しめる田んぼアートは視角から楽しむことができるものなので、良いイメージを与えやすいし、目で楽しんだ後は刈り取ったお米を舌で味わうことが出来るものです。

また、今は消費者のニーズの高まりから、農産物へ対しての安全性や品質、価格などにより注目されるようになっていますが、なかでも特に、農産物に対しての安全性が一番消費者の人々が重きを置いている項目だと思います。ですから、私たちはこのニーズに応えられる作物を作ることはもちろん、より安全で安心して食べられる農産物を作っていきたいと思います。そこで、ブランド商品というものの効果を考えました。ブランド商品は他の商品と差別化を図ることであり、これは消費者にとって商品の質を判断する際の指標になります。新潟県の魚沼産コシヒカリや北海道の夕張メロンなどブランド商品で成功した例はたくさんありますが、私の住む高知県はこれといったブランド商品が無く、私はこれが高知の農業のネックであると考えています。なにか一つでも大きなブランド商品が出来れば、高知の農業の活性化の足掛かりにもなるだろうし、これが他県でも成功すればお互いに良い意味で刺激しあい、地域同士高め合うことでそれは日本の農業に良い影響を与えるのではと思います。

以上に述べたことを実現することはとても難しいと思っているし、時間もかかることです。今の私の力では出来ることなんて極わずかなことですが、自分の中にある理想を実現するためにも今まで以上に農学に励みたいと思います。将来、日本の農業に少しでも貢献できるように頑張っていきたいです。

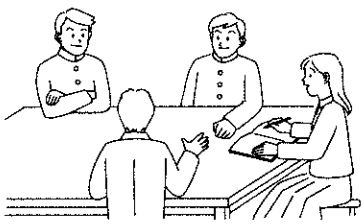
副会長のやるべきこと、やりたいこと

高知県立農業大学校
園芸学科一年　果樹専攻
谷脇友斗

僕が副会長になり、やりたいことは、自治会メンバーと話し合い、意見をまとめることだと思います。案を考えることは楽しいですが、複数の案を取り入れ、まとめ、それを自分の言葉として話すことはあまりやったことがありません。ですので、あまり得意な分野ではありません。だからこそ、苦手だからこそ、ちょっとでも改善出来たらいいかな、と思っています。もちろん一人で成し遂げようとは思ってはいません。会長を始めとする自治会メンバー、寮友、先生などにどこがわかりにくかったなどを聞き、試行錯誤はしていきたいと思っています。

その他には、生徒の要望に応え、身近なところだけでも叶えていけたら良いなと思っています。そのためには、生徒の立場になり、自分たちは何がしたいのか、何をしたら自分たちは納得できるのか、どういう風なルールになると在寮生活（学校生活）を快適に送れるか、ということを考え行動できるようになりたいです。ですが、副会長になり、皆をまとめるためには、まず、自分の行動を見直し、改善しなければなりません。今の僕はその面で子どもだと思っています。理由は、自分の今の態度、行動はこれから副会長になる振る舞いではないと思ったからです。特に反射的に発言してしまうところは、一番今、直さなければいけないところであります。もっと考え発言しないと言葉に力はなく、生徒の皆さんも不満だらけだと思います。なので、副会長になり自分がやりたいことを叶えていくと同時に、自分の成長にもつなげていければと思います。

今回、この役職になり、絶対にこなしきれない。最低限のことだけして後は、他の自治会メンバーに任せようと思っていましたが、今は、微力ながら生徒の皆さんが快適に毎日の学校生活を送れるように努力はしてみようと思います。



農大での二年間

高知県立農業大学校
園芸学科二年　花き専攻
西森康隆

農大での学校生活は、自治会会長をやることにより良い経験になりました。

自治会の仕事はどれも大変で、他のメンバーに多くの迷惑を掛けました。特によさこい祭りでは、私はアルバイトもしており中々練習に参加できず、迷惑を掛けました。また、アルバイトが休みのときは、よさこいへの参加のための提出書類を仕上げるために大変でした。そのために、練習に十分参加できませんでした。練習は全体がなかなかまとまらず大変でしたが、他の役員が頑張ってくれて、また次第に学生もやる気になってきた。本番では、全員が、まとまり楽しく踊ることが出来ました。全体的には良かったのではないかと思います。

また農大祭では、出し物を決めたり、会場設備などの準備のときは問題なく仕事をこなせましたが、農大祭の始めの挨拶のときに開始時間を間違えてしまい学校全体に迷惑を掛けました。それ以外は、問題なく仕事をこなせたと思います。

行事以外の学校生活については毎日楽しく過ごすことができました。昼休みや放課後に学生会館で時には友達としゃべったり、カードゲームをした事が思い出されます。実習面についても、好きなユリの栽培をまじめにやることができて満足しています。

今までの事を振り返ってみると、私は、自治会での活動で多くの人に迷惑を掛けたと、今回この原稿を書きながら思いました。自治会の仕事を任せられたときは、他人にこれ以上の迷惑を掛けられないと思い自分ひとりで仕事をすることが多くなり、逆に迷惑を掛けたと思います。

最後に、この学校生活で学んだことは沢山ありましたので、それは将来の役に立つと思います。自分だけで仕事をこなさず、他の人に手伝ってもらったり、また役割分担をするなど仕事を計画的に行い、しっかり仕事をやっていきたいです。また、これからの将来に向けて頑張って生きたいです。

学校での大切な思い

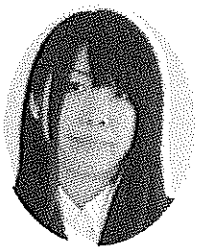
高知県立農業大学校
園芸学科二年　野菜専攻
宮川恭誓

私にとって高知農大での二年間は、とても充実した学生生活でした。

この学校での一年目は、初めての寮生活やプロジェクトなどで、新しくできた友達と戸惑いや苦戦しながら、楽しい寮生活を送っていましたが。2年目では、自治会副会長として、自治会の仲間たちで学生を引っ張っていきながら、私自身、不安だらけの一人暮らしが始まり、忙しい学生生活が始まりました。自治会として、よさこい祭りや農大祭など学校行事をしていきましたが、中でもよさこい祭りが苦労しました。自治会初めての、活動であり最大の行事のため、分からないながらも全力で臨みました。私は、地方車の作成の担当で、資材や経費、組み立てなどで、何度も話し合いや失敗をしましたが、周りの仲間や友達が手伝ってくれ、無事にできました。よさこいでの思い出は、自治会としても一人の学生としても、とても大切な思い出になりました。この学校で大切な思い出や、友達ができたのでとてもよかったです。

農大での二年間

高知県立農業大学校
園芸学科二年　野菜専攻
坂本成美



この農大生活二年間はあっという間に過ぎました。入学したての頃は知り合いもいなかったので不安でいっぱいで、寮生活やよさこいも嫌だったのを覚えています。でも、寮生活だったからいろんな人と話せるようになり仲良くなることができました。友達ができたからこそよさこいも楽しめたし、辛いことも乗り越えてこられました。一年の頃のよさこいのように楽しいものにしたいと、自治会に入り、メンバーとがんばってきました。自治会としてあまり仕事はできなくて練習は大変だったけど、本番は本当に楽しめたと思います。

また、一年の頃にはなかった農業に対する思いも、留学研修にいってからより強いものになりました。卒業し自分が仕事についたら、高知の農業のためにできることを精一杯がんばっていきたいです。農大にきたからこそたくさんの人と出会い、繋がりができたと思います。これからも人との出会いは大切にし、農大で学んだことを活かしていきたいです。

農大での二年間

高知県立農業大学校
園芸学科二年　果樹専攻
寺下眞夕

この学校に入校して、二年が経とうとしています。農大での生活は、夏のよさこいや、秋の農大祭やスポーツ大会など、たくさんの行事がありとても充実した日々でした。

入校して間もないころは、普通高校に通っていたため、普段の実習や授業について行くのがやっとでした。また、人見知りが激しく、なじめるか不安でした。しかし、農大の仲間達は明るく楽しい人たちばかりで、だんだんと学校に行くのが楽しみになりました。

自治会役員になって、よさこい祭りの指導をする機会があり、一年生に教えるのにとても苦労しました。でも、本番ではみんなが踊りを覚える事ができたので達成感を味わうことができました。

農大での生活を通して、農業の知識や技術の他にも、いろんな人と出会い、自分自身も成長できたように思います。社会人になってからも、農大で学んだことを活かして頑張っていきたいです。

農大生活において

高知県立農業大学校
園芸学科二年　野菜専攻
門田侑

私は、自治会役員として、体育委員の仕事をさせていただきました。農大ではスポーツ大会、農大祭、よさこい祭りなど、様々な行事がありました。その中でも、少し思い出に残っている、農家研修とよさこい祭りについて話します。

まず農家研修では、私の場合、オランダへの研修に行きました。目的として、オランダでは、施設園芸が盛んに行われているので、その技術を学びたいと思い研修に行きました。オランダで、苦労したことは、会話、食事、環境などでした。オランダでの研修の成果として同年代のオランダの学生やオランダ人の考え方、オランダの最先端技術を、知ることができ、自分の農業に対する考え方を変える、いいきっかけになったのではないかと思います。

次によさこいについて話します。よさこい祭りでは、苦労したことで、寄付金集めがありました。電話での言葉使いや挨拶など、様々な場面で苦労しましたが、皆のおかげで、何とか乗り越えることができました。また、練習ではとても苦労しましたが、本番みんなで、踊りきれた事は、非常にいい思い出になりました。

最後に私は、就農して家でナスを栽培しようと思っていますが、この農大で学んだ事、苦労したことを生かして卒業後頑張っていきたいと思います。

どいやで気張った一年間

香川県立農業大学校
野菜園芸コース　一年
松下和正

私が香川県立農業大学校に入学し一年が経とうとしています。農大では先輩の卒業、後輩の入学と、大きな節目を迎え慌ただしい毎日です。

私は高校が農業高校でした。農業がしたい！そんな気持ちはなく、入れる高校を探していたら農業高校にたどり着きました。高校では知らない所からのスタートだったので、がむしゃらに実習をこなし、時にはミスをして怒られる日々でした。それも二年生三年生と時間が経つにつれ慣れてきて、次は卒業後の進路について考えるようになりました。就職か進学か悩んだ末、農業関係の仕事に就きたいと思いました。残念な事に高校では農業関係の仕事は満足するものはなく、そして香川で農業をするためには香川の実践的な農業が知れるところで勉強するしかないと思い、香川県立農業大学校野菜園芸コースに進学を決めました。

農業大学校に入った時の印象としては、「小さいなぁ、こんなに農地小さいのか」でした。

三者面談で先生に「農大の印象は？」と聞かれ、もうどや顔で「小さいですね」と答えた自分が、今思えば周りもよく見えてなく人間として小さかったなと思います。

農大の実習で感じたことは、基本的な事がとても多いということです。一つの畝を自分で管理し、農業とはこういうものだと生徒一人一人に感じさせるというものでした。セルトレイに播種、畝に定植、追肥中耕、芽かき、除草、かん水、収穫そして撤去など一つの作物の一生を自分で世話することで、育てる喜びと食する喜びをもう一度考えさせられました。

秋には農家実習に行きました。農家実習とは、一年生が十五日間先進農家にいき、香川の農業を身近で感じる十五日間プチ農家体験です。私は葉物を生産している農家さんにお世話になりました。自分がやってきた農業と比べて大きく違うと思ったことは、作ってる人の気持ちでした。私は先生に指示した作物を指示通りに作る。農家さんは自分で工夫し、考え生きるために作る。この気持ちの違いはとても大きく、ちょっとしたミスでも「こらー！」と怒られました。でも不思議と農家実習が嫌だと感じることはなく、今まで知らなかったことをたくさん知れたことで、前より確実に自分が成長していたのがとても嬉しかったです。十五日目、最後の農家実習日は思った以上に寂しかったとともに、この十五日間で学んだことは絶対無駄にはしたくないと思えました。

次に農大での生活です。ほんと楽しいの一言に尽きます。個性豊かというか、キャラが濃すぎる友達に囲まれて、少々地味な私はたまにたじたじです。小中高の学校生活の中で、こんなに周り全員が優しく面白い友達なんて、体験したことなく最初はびっくりしていました。そして学校で少しずつ友達もでき始めた頃に、バレー部に入部しました。バレー部では、先輩に誘われ入部した方言ばりばりのおのぼり人とも出会い、一年バレー部の中では友達二人と楽しくバレーに励みました。二人とも経験者、私だけ初心者ということで、怒られて怒られてたまに褒められ、飴と鞭そして鞭という感じで少しずつ成長していきました。そして農学連スポーツ大会では二連覇を達成し、三連覇も私がいれば余裕だと改めて考えさせられました。ということで愛媛農大、高知農大、徳島農大の皆さん来年の試合も楽しみにしております！

最後に先輩方卒業おめでとうございます。こんなうるさい後輩達を怒ることなく、笑って接してもらえたこととてもうれしく思います。私も二年生になるということで就活が始まり、気を引き締めて学校生活を送りたいと思っております。ありがとうございました。先輩方、先生方、私を大好きな皆さん一年間お疲れさまでした。よし今日もバレーしよーっと！

農大生活を振り返って

香川県立農業大学校
花き園芸コース　一年
田中希咲

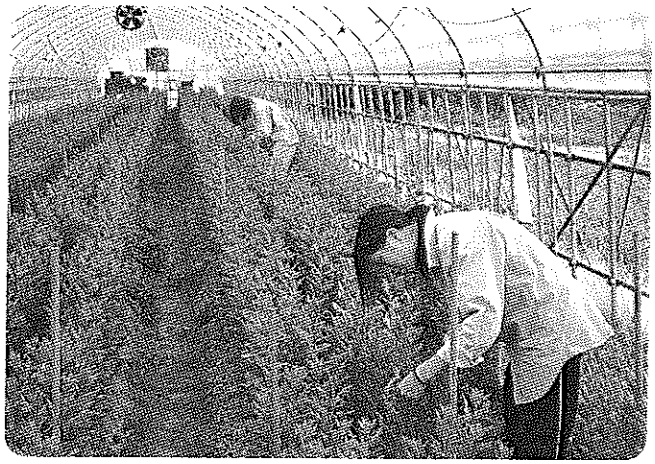
私が農業大学校に入学してから、もうすぐ一年が過ぎようとしています。入学当時は長く感じましたが、今となっては本当にあっと言う間の日々でした。

私は高校の時、石田高校で野菜を専攻していました。野菜も楽しかったのですが、花の勉強がしたかったので、親の知り合いの子が入っていたこの大学校に入学しようと思いました。基本的な作業はあまり変わりませんでしたが、鉢上げをしたり、ペンチを使ったり、ネットを使ったりしていて使ったことのない道具や農薬に戸惑ったりもしましたが、優しい先輩や先生に丁寧に教えてもらいました。専門の授業では、病害虫についてや花の生理障害などについて教えてもらいました。最初は覚えるのに必死でしたが、最近では少しずつですが、花のことが分かってきました。

農業大学校では、秋になると「四国農学連スポーツ大会」や「農大ふれあい市」といったような学生自治会主催のイベントがあります。

香川農大では、スポーツ大会のためのクラブが四つあり、私はそのうちのバレーボール部に入りました。バレーボール部には女子が少なく、二年生一人、一年生二人の計三人に対し、男子は二年生九人、一年生

四人の十三人です。なので二年の女子の先輩や一年生の女子が行かないこともあり、前半はなかなかバレー部の練習に顔を出せませんでした。しかし、先輩や同級生の男子が誘ってくれて夏休みが明けた最初の練習には行くことができました。今では、普通に練習に顔を出せるようになりました。あまり上達はしてないけど、これからも頑張っていきたいと思いました。



「農大ふれあい市」では、芋ようかんと芋蒸しパンを作って販売しました。頑張って売った結果、午前中にすべて完売したのが嬉しかったです。ふれあい市の前日には、野菜の販売物の手伝いが遅くまでかかったけど意外に楽しかったのを覚えています。

私は人見知りが激しく上手く友達を作れるか心配でしたが、今ではたくさんの人達と仲良くなれ、楽しい毎日を送っています。

農大で一年間頑張ったこと

香川県立農業大学校
造園緑化コース　一年
神高友樹

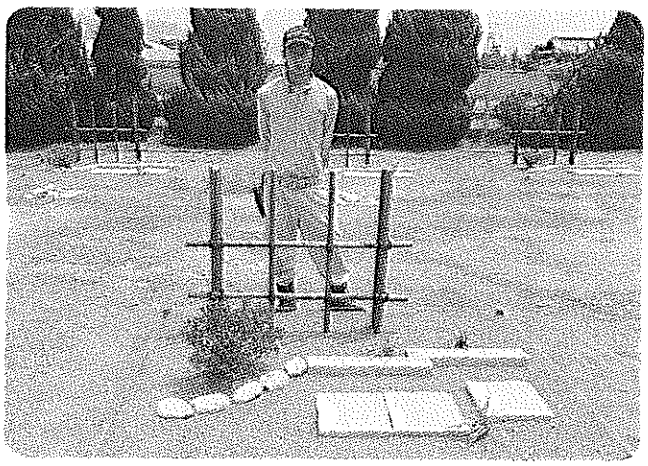
私が香川県立農業大学校の造園緑化コースへ入学してから、もうすぐ一年が経とうとしています。

私は香川県高松市にある「鬼無」という町に生まれました。「鬼無」は「日本一の盆栽の町」と言われており、その名の通り盆栽の生産が非常に多い町です。家のすぐ近くに鬼無盆栽センターがあったことや、祖父が盆栽の商売をしてたこともあって、自分の身の回りには盆栽や植木が数多くありました。こういったこともあり、もともと私には造園関係に対して興味や関心がありました。

私は高校を卒業して一旦は就職をしましたが、仕事を辞め、香川県立農業大学校に興味を持ち入学試験を受けることを決意しました。

しかし、私は農業高校出身ではないので、入学当初は実習や専門的な授業についていけるのか、少し不安でした。ですが、先生方や先輩方、友達と一緒に授業をしていくうちに、少しずつ慣れてきて、実習もついていけるようになりました。とは言え、造園に関しての知識がほとんど無い自分にとって、実習の作業は難しく、自分の頭の中で考えているように思い通りはなかなかできませんでした。

六月頃から造園の三級技能検定が近づいてきたということで、実技の練習が始まりました。実技の内容は、指定されている二時間以内に、所定の位置に竹垣作りや敷石、植栽です。この練習を本番までの約一ヶ月間、農場実習の時間に行いました。練習を始めた頃はどの作業も初めてで、最初につくる竹垣でさえ完成させるのに、時間以内にはできませんでした。正直、練習を始めた頃の時点でこの内容を時間以内に完成させられるようになるのか、非常に不安でした。先生や先輩に教えていただきながらも、練習を繰り返し重ねていくうちに、何とかできるようになってきました。



本番前日、この検定に向けて一生懸命練習してきたことを思い出しながら、すごく緊張し絶対に合格したいという気持ちでいっぱいでした。そして当日、猛暑の中検定がスタートしました。制限時間以内に終わらすことができ、合格はもちろん優秀賞まで受賞することができました。

三級技能検定をきっかけに、造園に関してこれまで以上に興味を持つようになった私はもっと頑張りたいと思うようになり、秋の農大のふれあい市という行事で和風の坪庭を造りました。勿論先輩や仲間に手伝ってもらいながら造っていき、初めて坪庭というものを造りました。自分なりに納得できるように頑張れたので、いい経験になったと思います。

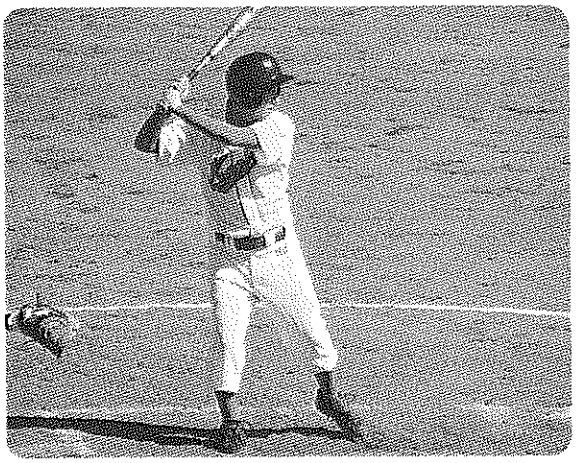
私は将来、農大でこの一年間頑張ってきたことを無駄にしないように、また、残り一年農大で勉強できるので、いろいろな事に挑戦して頑張って行きたいです。

農大生活を振り返って

香川県立農業大学校
果樹園芸コース　一年
鴫山和生

私がこの香川県立農業大学校へ入学して、はや一年が過ぎようとしています。私が農業大学校に入学しようと思ったきっかけは、実家が農家で将来農業を継ぎ、しっかりやっていけるようにと言う事で進学を決めました。入学当初はどういう人達とどのような勉強をするのかという期待と二年間やっていけるのかという不安でいっぱいでした。勉強面では初めて習う科目が多くて、授業について行くのが大変でした。高校の時と違い、果樹園芸コースの実習は最初に先生が指示をして、後は生徒たちで作業をします。剪定や摘蕾

など難しい作業がありました。初めてする作業ばかりで最初は戸惑っていましたが、先生方の助けや友達と協力し合って作業を乗り切ってきました。当然のことながら、夏は暑く、冬は寒い実習現場で、嫌になることもたくさんありますが、頑張って作業をしています。直売所でお客さんがたくさんのナシやキウイフルーツなどを買っている様子を見ると「実習を頑張って真面目にやっていて良かったなあ」と思いました。そして、苦難や感動があるからこそ、それを乗り越えていくという過程が、農業の醍醐味なのかも知れません。



この農業大学校に入ってからは多くの行事がありました。秋になると「農大ふれあい市」や「四国学連スポーツ大会」といった様々な学生自治会のイベントがあります。

香川県立農業大学校では、バレーボール、卓球、バドミントン、軟式野球といった運動系のクラブがあり、生徒たちは絶対にどれかのクラブに入り、クラブ活動をしなければなりません。私は高校ではソフトテニス部に所属していましたが、ソフトテニスが無かったので軟式野球部に入りました。ポジションは外野のレフトを守っています。野球部の全体練習は二ヶ月で一回位しかなかったので、昼休みや放課後に各々で練習するぐらいしかありませんでした。スポーツ大会での結果は、準優勝でとても嬉しかったです。私の成績は初戦はヒットは一本も出ませんでしたが、二つのフォアボールをとり、チームに貢献ができたのではないかと思います。それに、盗塁が一つできたことが嬉しく思いました。その他には、他県の人達と交流が出来てとてもいい経験になりました。

「農大ふれあい市」は、学生自治会が主催するバザーです。販売代金から必要経費を引いた儲けは自由に使えるので、各コースのみんなは完全に本気モードでした。果樹コースは、キウイフルーツやナシ等の農産物、手作りのしっぽくうどんとマロングラッセを販売しました。ほとんどが始まってすぐに売り切れたので嬉しかったです。これらの行事でみんなとの絆が深まっていい経験になりました。三月には、「研修旅行」があるのでとても楽しみです。

まだまだ果樹に関して知らないことも多いのに、春には二年生も卒業し新入生が入学してきます。知識が浅いのに、新入生にサポートできるのかなと思いましたが、出来るだけのことはしてあげたいと思いました。

今年からは自分の課題研究や進学活動などで忙しくなると思います。それにまだまだ分からないこともあるのでさらに知識を身につけて、農大生活を有意義に過ごして行きたいと思います。

酪農家を目指して

香川県立農業大学校
畜産コース　一年
中川聖也

僕が酪農家を目指そうと思ったきっかけは、高校の時です。僕は農業経営高校に入学して、初めて牛に触れました。あの時の牛の温もりは忘れられません。それをきっかけに牛について学ぼうと思い、二年で畜産を選択しました。二年では基礎的な事を座学で学びました。基礎的な事がわかり、三年に上がると次は実習が待ってました。実習になると座学とは違い実際に牛と触れあえるので、頭で覚えるのでなく、体で覚えることができました。座学とは違った楽しさがありました。一般管理の餌やりをしたり、勿論生物なので餌を食べれば排泄もしました。その排泄物の処理作業をしたり、乳牛では当たり前の搾乳をしたり、しないといけない作業がたくさんあります。ですが、好きでやっているので、嫌だと思った事は無く、やりがいがすごくありました。その反面、大変なこともありました。それは、牛の移動です。成長して大きくなった牛は、移動させなければなりません。移動さす時は、大きくなった牛の頭にロープを巻き、引っ張らなくてはなりません。牛も言う事を聞いてくれず、全く動かなかったり、なかなか動かないと思ったら急に暴れだす事もありました。牛が何を考えているのかわからず、苦戦した事もしばしばありました。

農業経営高校を卒業し、もっと乳牛について知りたいと思い、農業大学校に進学しました。農業大学校では基本的な事から詳しい所まで勉強します。高校の時に習った事を生かしながら学んでいます。実習と講義を挟みながら学んでます。実習では、高校と違い学校で作業するのでなく、実際の農家さんの所に行きそれぞれの農家さんのやり方を学んでいます。いろんな農家さんのとこへ行き、餌の違い、搾乳のやり方の違い、規模の違い、飼い方の違い等、色々な違いのあることがわかりました。高校ではやらなかった事もやらせてもらいました。講義ではそれぞれ分野の違う講師の先生が来て、畜産の詳しい所まで教えていただきました。一年の後半では畜産試験場に行き、また違った牛の飼い方を学びました。こういったたくさんの牛の飼い方を学び、将来の自分の酪農生活に向けて一つ一つ丁寧に身に付けて行きたいと思います。

未来の日本農業を支える国民的意識改革の必要性

～中国の食文化と比較して～

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
地域資源活用コース　一年次生
王然（わんらん）

私は小学校六年生の時に、中国黒龍江省から日本に来ました。毎年一回ぐらいは故郷に帰りますが、伯母が大きな畑を持っており、そこでトウモロコシを栽培しています。だから、私のイメージする中国の農村は、一面トウモロコシ畑なのです。

日本で食べるトウモロコシといえば、私的にはスイートコーンが最初に浮かびます。実が甘く、ねっとりしていて、糖分が他のトウモロコシより高い感じがします。中国では、トウモロコシを「玉米（ユイーミー）」と呼びます。品種はよくわかりませんが、私の故郷の一般的な農家で栽培されるトウモロコシの種類は、ほとんどがスイートコーンほどは甘くないものです。触感もかなり硬い感じがします。私自身、日本に来るまではユイーミーを美味しいと思って食べていたのですが、今ではスイートコーンの方が甘くて美味しいと感じています。故郷の伯母に品種改良や新種の導入を提案したこともありますが、農業収入も少なく生活もギリギリのため、赤字のリスクがある取組には抵抗があるということでした。

しかしながら、ユイーミーにも魅力的な特長があります。デンプンが多いため腹持ちがいいことです。また、地域によっては乾燥した後、粉にして保存食として活用します。食べる直前にしばらく茹でて、おかゆにして食べます。見た目は日本で売っている粒入りのミカンジュースとよく似ていますが、匂いが香ばしく、濃厚な味です。伯母に、「なぜ乾燥させるの？」と質問したところ、「糖分が少なく虫がわきにくいから、昔から保存食としても活用してきたのよ。」とのことでした。

その他、私の故郷で栽培されている作物を紹介します。まず、大豆（ダァドゥ）です。大豆は主に大豆油に加工します。私の故郷では一般的に使う油は落花生から作りますが、双方とも独特の香りがあり、好きな人にはやめられない風味となっています。ちなみに、九〇年代以降に生まれた人たちは、菜種から取ったサラダ油の方を好むようです。

次に小麦（シャオマイ）です。麦は昔から中国でよく食べられています。小麦を使った独特な料理に「饅头（マントー）」があります。小麦粉を水で溶き、こねた後、釜で蒸します。形はアンマン、でも中身が無いバージョンです。もちもち感が最高です。最近は生卵を入れてこねたマントーも出ています。

小麦の販売方法に関しては、中国と日本では大きな違いがあります。日本では、強力粉、中力粉、薄力粉の別で販売していますが、中国では、一号、二号、三号に分かれます。日本の米にたとえるなら、一号とは精米のときの上白米、二号は少し質が落ちた白米、三号は白米とは思えないような色が付いているものです。つまり、一号、二号、三号とは、上、中、下のようなランクを表すものなのです。しかし、三号も、香りがよく、人によっては人気です。

最後に水稲（シュイダウ）、つまり米です。稲作に関しては、実家で作っていないため、友達の家へ遊びに行った時に見学させてもらいました。作業内容に関しては、日本との差異はほとんどありません。しかし、その調理方法は驚きです。例えば、いくつかの家族では、一枚の畑に数種類の米を植える場合があります。例えば、糯米（ノウミ）、大米（ダァミ）、江米（ジャウミ）の三種類を同時に栽培し、炊くときもそれらを混ぜて炊きます。日本でも、健康食品として古代米を含めた数種類の米の入った商品がありますが、私の故郷では日常的に複数の米を同時に栽培し、同時に炊いて食べる習慣があります。

以上、私の故郷の農作物と食文化の一端について紹介させていただきましたが、辛くて油っこい中華料理のイメージからは想像もできない質素な食生活が私の故郷にはありました。これらの食習慣は歴史の中で創られてきたものですが、栄養や健康にも配慮されており、昔の人々の知恵やライフスタイルには頭が下がる思いです。今、私は十九歳で、まだまだ伸び盛りなので、どうしてもファストフードや肉などの高カロリーの食べ物を好む傾向があります。しかし、時々、こういった幼少の頃に慣れ親しんだ料理を食べたいと思う時もあります。

日本に住み始めて7年目。農業大学校に進学したぐらいですから、私は農業にとても興味があります。もちろん、野菜を食べることも大好きです。日本の野菜は美しい。機能的な容器に整然と並べられ、産地や賞味期限等も明確に表示されており、安全・安心なイメージがあります。前述した中国の小麦のような、いわゆる二級品・三級品は店頭には並べられていません。また、販売戦略というか、広報活動もしっかりと行われています。広告に載った野菜の写真はどれも新鮮で美味しそうに写っていますし、店頭の陳列方法にも創意工夫がなされており、消費者には魅力的だと感じます。これらは、社会の要請や消費者ニーズをしっかりと捉えた法整備や研究の賜ではないでしょうか。

しかし、それらの要素を強調するあまり、値段が異常に高く設定されているようにも感じます。例えば、時期によればキャベツ一玉が二九八円！　トマト五個入りで三九八円！需要と供給の関係からこうなるのでしょうが、中国出身の私から言えばあり得ない値段です。この値段の背景には、徹底した品質管理もあるのでしょう。確かに、

日本の野菜や果実に虫食いが見られることはありません。しかしながら、私も毎日、日本で生産した（高価な！）野菜を食べていますが、味は中国のものと比べて特別美味しいとは感じません。また、選りすぐられた商品だけしか店頭に並ぶことができないとしたら…　残りの規格外の商品や多少傷のある商品はいったいどこに行くのでしょう。加工用に出荷されるのでしょうか。それとも廃棄されるのでしょうか。

農業大学校での学びや、実習販売の経験の中で、私は形の悪いものや、少し虫が食ったものがあれば、その品質や味に関わりなく、ほとんど商品価値がなくなるという事実を知りました。例えば、農家が規格外の野菜を市場に持っていたとしても、出荷のための箱代にもならないような値段で取引されることを知りました。このままでは、（完璧な）野菜の値段はますます高騰するし、気候や災害を初めとする環境に左右されやすい農家の収入は不安定になっていくのではないでしょうか。この傾向は、消費者にとっても、ほとんどの農業従事者にとっても不利益を被ることだと私は考えます。

もし、野菜菜園を持っている一般家庭で、少々傷のあるトマトやキュウリが収穫されたとき、彼らはそれらを廃棄するでしょうか。むしろ、「俺が作ったんや。おいしいやろ？」と自慢しながら食べるはずです。それが人間として自然な姿だと私は確信しています。野菜にしても果物にしても、常に贈答品にするわけではないので、「安全・安心で美味しければ見かけや規格はOK！」、このようなトレンドが社会に流れないでしょうか。

私にとって、日本での生活は、安全で便利で裕福です。でも、時々、生活面でも精神面でも質素だった、でも何となく幸福だった当時の中国での暮らしが懐かしく思える瞬間があります。この夏、日本では、国や地方公共団体が中心となって、節電に取り組みました。クーラーの代わりに扇風機！　不要な電気は消す！　服装も涼しく！等、日本全体が昔に戻ったみたいに質素な生活にチャレンジしました。「いつか日本も、食に関して、生産者にも消費者にもやさしい文化が確立されたらいいな。」そんなことを考えた農業大学校一年の夏でした。

農業と自然の共存について考える

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
生産技術コース　一年次生
中妻大貴

私の故郷は田舎です。絵に描いたような日本の原風景が広がっているわけではないですが、小さな町の中に水田や畑がポツポツとある、そんな風な田舎です。私の実家の近所にも水田があり幼少の頃は友達とオタマジャクシやカエルを捕まえたりして遊んだりもしました。また私は、幼少の頃より農業の手伝いを通して自然と触れ合ってきました。太陽、雨、風、温度、土、そして昆虫たち…　農にとって自然は味方であり、時に敵にもなりうりますが、確かなことは、農にとって自然は不可欠なものだと言うことに気付きました。そしてそんな自然がいつまでもあって欲しいと思っています。

農業と自然は密接な関係にありますが、最近では施設栽培や工場栽培のように、自然というよりは人工的な栽培方法も多いです。しかし農と自然が完全に切り離されることはよほどの革命的なことがない限りまだまだ先のことでしょう。これからも農業は自然と対話していく必要があります。昨今、世界中で環境の保全や生態系の保護が叫ばれています。農業もより自然に優しい方向に向かっていく必要がありそうです。自然に優しい農業とはなんなのでしょうか。少し考えてみようと思います。

いつかは忘れましたがテレビで日本のあるリンゴ農家の特集を目にしました。木村秋則さんという方です。なんでも木村さんは当時絶対に不可能だといわれていたリンゴの自然栽培を成功させたというのです。私はそれを見てはじめて自然栽培というものを知り、自然とヒトに優しいその農法と木村さんのなにがなんでも諦めない根性に感銘を受けたのを覚えています。

自然栽培とは大ざっぱに説明すると、無化学農薬、無施肥、不耕起、無除草を実施した農法のことです。ただ特に基準は定められていないようです。しかし普通は肥料も農薬もやらずにまともに作物が育つはずもないだろうと思うでしょう。私だってそう思っていました。しかし木村さんは不可能を可能に変えました。では自然栽培ではどうやって作物が栄養を得て育っているのでしょうか。答えは「土の力」を生かすことにあるようです。土の中の微生物や菌が働くのに最適な環境を作ることで栄養豊富な土になるのです。自然栽培にはいろいろなやり方があって耕起や除草を肯定する人もいます。しかし、故・福岡正信氏の農法はそれらを全て否定しています。どちらにせよ、様々な自然栽培に共通していることはやはり「土の力」を生かすということです。自然栽培によって育てられた野菜の特徴としてやはり化学肥料や化学農薬を使っていないので安心で安全だということです。また慣行農法の野菜に比べて腐りにくいとも言われています。

しかし自然栽培もいいことばかりというわけでもなく、当然のことながら問題点もあります。ひとつは慣行農法からの転換に時間がかかるということです。木村秋則さんの著書によれば、コメの栽培を慣行農法から転換する場合には、田から肥料や農薬の影響が抜けるのに年三程度かかるとあります。その間害虫も発生し収穫も期待できない為、片手間で農業をやっている兼業農家ならともかく、農業一本で食っている専

業農家には自然栽培への転換はとても厳しいと言われています。

自然に優しいと謳われている農法には、他に有機農業があります。有機農業とはJAS法の有機JAS規定を満たした農法のことで、誤解されがちですが無機肥料や農薬を全く使わないという農法ではありません。有機JAS規定ではさまざまな無機肥料、農薬の使用が許可されています。また農水省の有機食品の検査認証制度のページによると、有機食品のJAS規格に適合する生産が行われていることが認定されなければ、農産物に「有機」や「オーガニック」等の名称表示は法律で禁止されています。

有機農業にも問題点はあります。例としては、除草や病害虫の防除などに大変な労力がかかるということです。そして生産が安定するまで慣行農法よりも収量が減少しますし、さらには品質も低い場合が多いのです。

これらの農法は日本ではどれだけ普及しているのでしょうか。日本の全耕地面積のうち有機農業の占める割合はパーセントにも満たないのです。有機農業でこの値なのだから自然栽培がさらに低い数なのは自明でしょう。

次に、なぜこれほどまでに日本では自然栽培や有機農業といった農法が普及しないのでしょうか。それはやはり「儲からないから」だと私は思います。成功している農家も少しはあるでしょう。しかし農業だって職業なのですから、安定して儲からなければ話になりません。自然栽培や有機農業はただでさえ労力がかかるというのに、それに見合うだけの収入が得られないのであれば誰もやるはずがありません。それに農業は生産活動の一つでもあります。より高い効率を求めて慣行農法や工場での栽培を行うのは当然のことです。しかし効率化や生産性一辺倒で環境のことなど無視したやり方をこの先続けていけば大きなしっぺ返しを食らいそうです。効率や儲けが全てではないと私は思います。そうは言っても自然栽培や有機農業はもっと安定する為の改良が必要でしょうけれども。

自然やヒトに優しい農業を探求するのに化学的な農薬や肥料についてはいろいろと考えさせられます。極端な例ですけど、自然栽培や有機農業を営んでいる方や推進している方の中には、化学農薬や化学肥料を悪だと考え、天然由来のものは安全だと妄信しているような方がいるようです。世間一般でも農薬は悪いものだというイメージを持った人はかなり多く存在します。ですが果たして本当にそうなのでしょうか。もちろん農薬には毒性があります。しかし現代の日本では、農薬の使用基準は法律整備がなされており厳格なものです。規準を破った農家には罰則も与えられます。また、くん蒸、航空機を用いた農薬の使用、そしてゴルフ場での農薬使用に際しては、農薬使用者が使用計画書を農林水産大臣に提出しなければいけません。行政による農薬リスク管理も厳しく行われています。以上のことから農薬によって起こる人体や環境への重篤な被害はまず生じないと言えます。

結局、自然とヒトに優しい農業とはどんなものなのでしょうか。私は自然栽培や有機農業だけを賛美するつもりはありませんし、慣行農法が悪いとも思いません。私が考える答えは一様ではない農業です。多様性の中に豊かさはあると思うのです。こんなやり方が正義、こんなやり方が悪などという決め付けや押し付けをせずに、皆がルールに則ったうえで自分の農業を追求する。スーパーなどの店頭にはいろんな方法で栽培された農産物が並んでいる。それが理想だと私は考えます。多様性が求められるのは農業だけではありません。消費者も固定概念を捨て、メディアなどの他者から与えられる情報をただ鵜呑みにするのではなく「自分の頭で考え」能動的に客観的な情報を集めてそれぞれが自分の考えや信念を持つ必要があると思います。それが自分のためにもきっと自然の為にもなると思います。

最近の子供は自然に触れる機会が少ないと言われています。冒頭でも述べたように、私にとって農は身近な自然でした。私は今の子供たちや、これから生まれてくる子供たちにも、農を通して自然に触れて欲しいと思っています。農業こそが最大の自然破壊だという人もいます。だけど私は、ヒトは自然の一部でありそれ故にそのヒトが行う活動である農業も自然の一部だと思っています。そして故郷の町の中にあるような美しい自然がいつまでも残っていて欲しいと切に思っています。

農業大学校での二年間

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
アブリビジネスコース　二年次生
西村結衣

私が農業大学校へ入学してから、はや二年が経とうとしています。気付けばあと少しで卒業です。振り返ってみればいろんな出来事がありました。

入学してからまだ日が浅かった新入生歓迎会では、ボーリング大会をしました。一年生と二年生混合のチームだったので、先輩方と仲良くなれるか不安や緊張がありましたが、先輩方はとても優しくフレンドリーに接してくれたのですぐに仲良くなることができました。

剣山登山では、グループではしゃぎながら行動していたのですが、いつの間にか登山ルートを間違っていました。ですが、そのルートは最短ルートだったらしく、他のグループよりも早く到着することができました。登山は道が険しく、何時間も歩いてとても疲れたけど、山の天然水は冷たくて美味しく、自然や山頂から見る景色が綺麗だったので疲れも吹っ飛びました。

農学連スポーツ大会では、二年間バレーボールの選手として出させてもらったけど、優勝できなくて悔しかったです。でも、ス

ポーツを通して、他の県の農大生と交流することができて楽しかったです。

農大祭は、今年度が今ある場所で行える最後の農大祭でした。学生や外部の方と協力して盛り上げました。私は、自治会に入っていたので、農大祭のスケジュールやイベントなどの計画に携わっていましたが、学生が中心となって行事を進行することは大変だと感じました。私はもう農大を卒業しますが、次年度から新しくできた農大で行われる農大祭が楽しみです。

二年生になってから本格的に始まったプロジェクト課題では、「柿の葉でお茶を作る」という少し変わったことをしました。最初はこんな課題が出来るのだろうかと不安でしたが、先生方の手助けもあり、機能食品としての価値を見出すことができ、農大の模擬会社の商品「柿の葉茶」として販売することができました。この「柿の葉茶」のマスコットキャラやロゴデザインは私が考えて作製しました。多くの方に好評だったので少し自慢に思っています。

この二年間、共に過ごしてくれた仲間達に、出会えたこと、同じ時間を過ごせたことに感謝します。そして、お世話になった農業大学校の先生方、本当にありがとうございました。

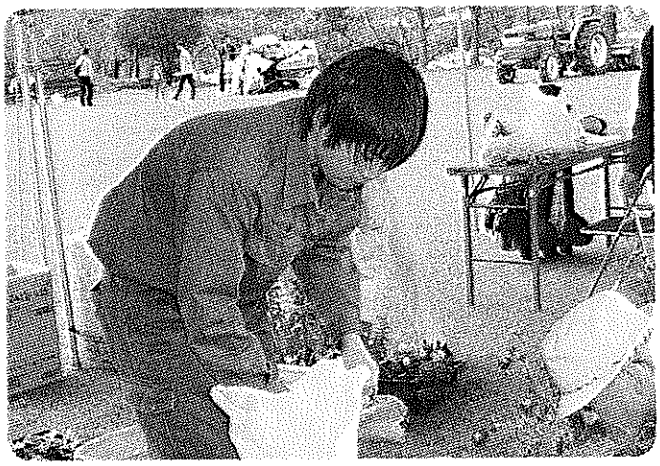
「徳島農大で学んだこと」

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
アグリビジネスコース　二年次生
林　健太

私が農業大学校に入学してあっという間に二年がたとうとしています。この二年間を振り返ると色々なことがありました。農業に関する知識や技術はもちろん、学生自治会や模擬会社「そらそうじゃ」の役員として様々な経験をさせていただきました。私は農業大学校に入学するまでは、農業に馴染みがなくたいした知識ももちあわせてはいませんでした。ですが、農業大学校で学ぶうちに農業の楽しさや難しさ、やりがいを感じることができよりもっと農業を深く知りたいと思いました。

私は自治会と模擬会社の役員を掛け持ちしており学校内外の様々な行事やイベントに参加させていただきました。自治会では主に学校内の行事をし、模擬会社では学校の外での活動に取り組みました。特に模擬会社の活動では、県内外の有名な企業の方々とお会いしお話をいただいたり、お互いに協力して企画開発をするなど普段できない経験をすることができました。また、行事やイベントなどみんなで一丸となって取り組むことの難しさや大切さを知ることができました。このことで農業大学校での模擬会社のあり方を考えるよい機会になり、将来農業経営をするうえでよい教訓になったと思います。

農業大学校で学んだことはたくさんありますが、その中で一番大切だと思うことは人のつながりだと思います。農業はけっして一人ではできません、必ず誰かと協力して行います。それはもしもの時、誰かがいると危険がぐっと減り能力も向上するからです。ですから、農業をする上で人とのつながりは最も重要なことだと思います。だから、私は将来、人とのつながりを大切にする農家を目指してがんばっていきたいと思います。



毎日が新しい体験　日々成長しています！

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　農産園芸コース
山本潤也

私は、農産園芸コースの野菜を専攻し、季節に応じた野菜を栽培しています。私たち一年生の野菜チームでは、「効率のよい作業をすること」を常に心がけ、実習に取り組んでいます。毎週水曜日には「農大直売所」を開催し、季節の果物や新鮮な野菜、切り花や花壇苗などを地域のお客様にお買い得の価格で販売しています。「農大のトマトは甘くて美味しい」、「新鮮で安いから嬉しいね」とよく言っていただけます。この言葉があるからこそ私たちの励みになり、作業にも一段と力が入ります。

また、六月と九月の二班に分かれて行われた北海道農業体験実習では、札幌市から北に一五〇㎞離れたところにある士別市の農家さんの家に泊りこみをし、農作業をしました。私がお世話になった農家さんでは、主に大型機械に乗り、ジャガイモの選別やビート畑の除草作業などをしました。学校とは比べものにならないくらいの農場の広さに唖然とし、不安になりましたが、親切な指導もあり、とても貴重ないい体験ができました。

十二月二十五日に徳島県三好市で行われた四国ブロック意見発表大会では、愛媛農

大の代表として、発表をしました。私の叔父はみかん農家であり、少子高齢化と過疎化の進む八幡浜市を地域活性化し盛り上げたいという思いを、四国各県に伝えました。

他県の七名の発表も、それぞれの農業に対する考え方や、将来のことを語ってくれ、新たに農業の魅力や楽しさが伝わったいい意見発表会となりました。

私の目標は、農業の楽しさを教えたいとの思いから、「農業高校の教員」になりたいと考えています。高校時代では、土にふれる機会が少なく、まだまだ野菜に関する知識が未熟ですが、みんなに負けない気持ちとやる気も持ち実習に取り組みたいと思います。そして、私の目標に少しでも近づけるように努力し続けます。

一年間を振り返って

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　農産園芸コース
在間貴大

私が農業大学校に入学したいと思ったきっかけは、一つめは私自身の学力の問題と、高校で農業科を選択していて、学んだことを生かしたかったのと、もう一つは、父がこの農業大学校の出身であり、父の話を聞いて、交通面は山にあるので不便だが、なかなか楽しいところだったと言っていたことが主な理由です。

高校三年生の時に就農啓発講座やオープンスクールなどに参加してなかなか良いところだと思いました。

入学式の当日に他の一年生を見て私と同じぐらい大きい人が四、五人もいることに驚きました。入学後、さまざまな講義や野菜、花き、果樹の自習をこなしていきました。一学期の講義の中で一番苦手だったのは英語でした。英語では私の理解力不足か、勉強不足かはわかりませんが、あまり理解できずに、所々友人に教えてもらいながら講義についていっているような状態でした。一学期の終盤に入り、各自の志望コースに分かれて実習や水やり当番を行うようになると、花きコースは五人しかおらず水やりは一年の仕事なので週番が大変だと思っていたら、やさしい二年生が手伝ってくれたので大変感謝しています。夏休みも来年になったら就職活動やプロジェクトの関係でかなり忙しいと予想されるので、学生生活最後の夏休みだと思い、夏休みは実習以外の日は思いっきり楽しみました。

後期に入ると北海道の研修があり、うまく作業についていけるか不安に思いながら北海道へ向かいました。北海道の上空から広大な農地を見てついに来たんだなと思いました。バスで士別市に移動して、受け入れてくれる農家さんと対面し十八日間の体験実習が始まりました。正直農家さんでの収穫実習はかなり大変で明日のことなどを考える余裕が全くないほどでした。収穫はカボチャがメインで、ジャガイモなどもありました。作業は収穫のほかにニンジン、玉ネギ、カボチャ、ジャガイモの出荷準備などをしました。それから二週間、今まで味わったことのないようなハードな実習をし、士別市の様々な農業施設を見学などして、無事に北海道研修を終えることができました。

収穫祭では多くの人が来ていて、驚きました。役割は餅つきでしたが、餅まき用の餅を作った時はさすがに大変で、すべての餅を丸め終わるのに六時間もかかりました。当日はついた餅を丸める係でしたが、前日のこともあり、慣れていたのでスムーズにできました。それが終わったら販売のほうを手伝っていたのですがなかなか売れず、売れ残ってしまいました。

他にもスポーツ大会や農林水産デーでの交通整理、先進農家事例研修で農家さんたちの経験したことや、苦労したことなど話を聞いて勉強したりするなど、大変でしたが、有意義な時間を過ごすことができました。

この学校にこなければ体験できなかったことを体験できたほか良い友人もでき、この学校にきて良かったと思います。また、高校よりも農業を深く知ることもでき、農業大学校に入学できて良かったと思いました。

祖父との約束

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　果樹コース
田内和成

私の実家は、農業を営んでいる祖父と祖母が一緒に住んでいます。祖父は、幼いころ勉強も十分、受けさ

せてもらう事無く、ひたすら野山を開墾し、農地を増やしていたそうです。

現在我が家には一八五aの農地があります。すべて祖父が苦労して切り開いた農地です。そこにブドウやミカンを植え付け、今はブドウ一〇〇a、ミカン八五aを栽培しています。

そんな祖父の元について私は、幼いころから祖父の手伝いをしてきました。ブドウのシーズンには、トンネルのビニール張りや袋かけ、収穫や出荷調整などを手伝い、ミカンシーズンには、震えるような寒さの中、朝早くから山に行って収穫の手伝いをしました。

一方祖父は、私の面倒をよく見てくれました。熱を出した時は、仕事中にも関わらず病院に連れて行ってくれました。また、骨折した時は、朝早くから学校に送って行ってもらったり、仕事途中でも学校が早く終わったら迎えに来てくれたので感謝の気持ちでいっぱいです。

農作業では、私の師匠として生活面でも働く両親の代わりに私を支えてくれた祖父ですが、その祖父も今では、年を重ね足の状態が悪くなり、荷物の移動は機械頼りでもはや周りの手助けなしに、農業を続ける事は困難になってきました。

私はいつかそんな祖父の跡を引き継ぎ、農業をしたいという思いが芽生えてきました。祖父が人生の大半をかけて、一生懸命作り上げた農地と愛情を込めて育て上げたブドウやミカン、祖父の思いがぎっしりと詰まったその果樹園を引き継ぎ祖父のような立派な農業者になるため、愛媛県立農業大学校に入学したのです。

現在、私は果樹コースに所属し、ブドウやナシ、キウイフルーツやモモなど落葉果樹と温州みかんや伊予柑、デコポンなどの柑橘の栽培について学んでいます。受粉や摘果、袋かけや防除など、基本栽培を中心に実習を行っていますが、二年生になると果樹研究センターに出向き、研究員についてより専門的な指導を受けたいと考えています。私の実家は、ブドウを中心にミカンを栽培しているので、果樹研究センターでは落葉班に所属し、ブドウの最先端技術を学ぶつもりです。また、愛媛のオリジナル柑橘である愛媛果試第28号（紅まどんな）の生産にも取り組むつもりですので、その栽培技術も習得できればと考えています。

私は卒業後、祖父から学びながら農業をするつもりですが、祖父の足を引っ張らないように、戦力として頼りにされるように、農業の技術や知識を学びたいと思います。

寮生活と学校生活

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　畜産コース
松野隆志

「一年生は全員寮生活」愛媛県立農業大学校ではそう決められているので、入学が決まった後、私は親と一緒に生活に必要なものを買いに行きました。

私は、学校から渡されたプリントに書かれていたものだけを買って帰ろうとしたのですが、親は「これも買っといたほうがいいよ」と余計なものまで買おうとするので、たびたび喧嘩になりました。

そんなこともありましたが、無事に買物も済ませ、寮の自分の部屋に運びんで寮生活の準備が整い、入学式を迎えて私の農大での寮生活が始まりました。

寮の部屋は二人で一部屋だったので、同じ部屋の人が怖い人だったらどうしようと心配していましたが、おとなしそうな人だったのでほっとしました。

初めのうちはあまり話をしなかったけれど、徐々に話をするようになり、今ではよく話をする仲になっています。また、その人は朝起きるのが早いので、朝寝坊をしやすい私にとっては、ありがたいことだなあと思っています。

でも、寮生活はそんなにいいことばかりでもありませんでした。例えば、洗濯しようとしても洗濯機の数が少なくてなかなか洗濯できなかったり、寝ようと思っても外がにぎやかでなかなか眠ることができなかったりもしました。

だけど、このような事は、寮生活をしないと体験することができないことなので、いい思い出になるのかなと思っています。

学校生活では、講義と実習が主にあるのですが、私は初めから農業にかかわりのある講義がほとんどなのかなあと思っていたら、英語や法律など直接農業には関係のない講義が多くて、「あれっ」と思いました。また、高校とは違って九十分講義だし、それが二限続けてあるので辛いなと感じました。

実習は自分の希望したコースで初めから行うのではなくて、三班に分かれて、野菜・花・果樹の実習を体験していきました。実習になると時間がたつのが早く感じられました。

六月になるとそれぞれの希望コースでの実習が始まりました。私は野菜コースを希望し、実習をしていましたが、親に「本当に自分がしてみたいことをしたらいいよ」と言われ、九月まではコースの変更ができるということなので、七月からは畜産コースに変更しました。

畜産の勉強は、学校の近くに実習場所がないので、バスで西予市にある畜産研究センターや西条市の養鶏研究所に行って実習を行うようになりました。でも、九月までは畜産についての詳しい勉強はあまりできませんでした。

本格的な講義が始まったのは、コースが確定した十月からで、畜産研究センターでは、家畜の解剖学や豚の品種やワクチン、牛の搾乳の仕方など具体的な畜産の知識を学び、養鶏研究所では鶏の品種や卵が作られるまでの工程などを学んでいます。

農業大学校は二年間で卒業となるので、寮生活も学校生活も残り一年少しとなってきました。私はいまだにどんなところに就職したいかということを決められていないので、早く決めないといけないなと思っています。また、残り一年余りでもいい思い出をたくさん作っていこうと思っています。